ユニセフ
大阪通信
Unicef Osaka Newsletter
大阪ユニセフ協会ニュースレター　2023年8月18日発行
vol.23 No.91

CONTENTS

2-3 大阪公立大学学長　大阪ユニセフ協会理事
辰巳砂昌弘さん
「子どもの戦時下」我が事として考えよう

4 ユニセフセミナー大阪 2023 レポート
紛争が絶えないアフリカの未来を見つめる

5 活動紹介　No.40
音楽を通して社会貢献、再開する喜び

8-1 ユニセフチャリティバザーのご案内

8-2 ユニセフシアター
第３回上映会のお知らせ

大阪市現代芸術振興事業 Breaker Projectが美術家・きむらとしろうじんじんと実施する廃校跡でのプロジェクト「作業場＠旧今宮小学校」。小学校に残る陶芸窯や学習園、廃材、倉庫などを活用し魅力的な作業を生み出し、誰もが立ち寄りたくなる場をめざして継続した活動を展開することで、多世代が集まるサードプレイスを形成しつつあります。写真は枝木の剪定をする子どもたち（活動については本紙 90 号で紹介）。　photo：ブレーカープロジェクト

大阪公立大学学長、大阪ユニセフ協会理事　辰巳砂昌弘（たつみ さごまさひろ）さん

「子どもの戦時下」我が事として考えよう

子どもの「未来」が、奪われ続けています。国連は6月27日、児童と武力紛争に関する年次報告書を公表して、世界の24カ国・地域で殺傷や拉致など何らかの被害に遭った子どもは、1万8890人にのぼったと指摘しました。大阪公立大学は、大学憲章に「人類の平和と社会の持続的な発展に寄与する」と謳っています。7月11日の昼下がり、大阪市住吉区のキャンパス本部棟で、大阪公立大学学長であり、大阪ユニセフ協会の理事を務めている辰巳砂昌弘さんに聞きました。

（平田篤州）

知の拠点

――子どもたちの話の前に、大学についてお聞きします。大阪公立大学は昨春、大阪市立大学と大阪府立大学が統合して誕生しました。2年目となる今年4月の入学式の式辞で、五代友厚（1836–85）と關一（せきはじめ）（1873–1935）、赤間文三（1899–1973）の3人の名前を引かれました。どんな想いがあったのですか。

辰巳砂　両大学は、それぞれ約140年の歴史、約8000人の学生を有しており、まさに対等な統合でした。これまで、多くの人々が両大学を支えてきました。その象徴として、市大の淵源である大阪商業講習所を1880（明治13）年11月に興した五代友厚、その講習所が発展して日本初の市立大学である大阪商科大学になった時（1928年＝昭和3年）の大阪市長、關一。そして、府大の淵源である獣医学講習所が発展して、浪速大学になった1949（昭和24）年当時の大阪府知事、赤間文三を紹介しました。

大阪公立大学杉本キャンパス本館（1号館）。国の有形登録文化財になっている

――五代は「利他の精神」、關は「国立大学のコピー（コッピ―）であってはならぬ」。そして赤間は「日本一の大学をめざす」と言いました。

辰巳砂　両大学の歴代学長は、3人を常に讃えてきました。私も、先達や卒業生への敬意の想いを込めて、式辞で話しました。単に2つの大学が引っ付いたのではありません。歩みはそれぞれ違い、両大学とも素晴らしい歴史を持っています。そして、大阪には国立、私立も含めて100年以上も前から多くの「知の拠点」がありました。統合を機に（次代を担う子どもたちのためにも）これまでの歩みをまとめていきたいと思います。

ユニセフとの出合い

――さて、ユニセフの話です。最初に「ユニセフ」に出会ったのは、いつごろですか。また、大阪ユニセフ協会の理事就任の話を聞かれた時は、どんな思いでしたか。

辰巳砂　正直に言いますと、結婚してからですね（笑）。妻が年末に、ずっと寄付していました。ユニセフから案内状が届きますよね。そこに発展途上国の子どもたちの写真があって、「あなたの寄付でこれだけ救えます」と書いてある。「ええことやってんねんな」と思っていました。そして学長に就任したら、理事就任のお話。驚き

ました。世界的組織のユニセフに関わらせていただける。身の引き締まる思いでした。

――ユニセフは、1946年12月の国連総会の採択で生まれました。先の大戦で困窮した、何百万人もの子どもたちへの人道支援が目的でした。

辰巳砂　戦争や紛争によって、学びの場を奪われる、可能性を奪われている…そういうことに、ユニセフは想いを寄せていますよね。アジアでも、子どもたちが大変な状況になった。ユニセフに支援されて日本の子どもたちも救われた。ほんとに感謝の気持ちでいっぱいです。

――ウクライナの戦火がやみません。

辰巳砂　昨日まで日本と同じような暮らしをしていた子どもたちの日常が、突如変わる。ウクライナで起きていることを、自分のこととして考えなくてはいけない。日本の子どもたちも、不安に思っているでしょうね。現代は、リアルタイムで何が起きているかが、わかる時代。いろんな思いの方がいるでしょうが、子どもたちに関して言えば「それはないよね、早く終わってほしいよね」。妻とは、いつも「一刻も早く終わりに」と話しています。

〈国連のグテレス事務総長は6月、「児童と武力紛争に関する年次報告」の付属文書「子どもの権利侵害リスト」に、ロシアを初めて掲載した。武力紛争下でも国際法で保護されるはずの学校と病院の計480施設が襲撃され、136人の子どもを殺害、518人に重傷を負わせた、とした。安全保障理事会の常任理事国が、リストに掲載された例はない。一方、ウクライナ軍による戦闘地域でも子ども80人が死亡、175人が重傷を負ったと指摘。国連事務総長特別代表のガンバ女史は「ロシアの侵略への対応」と留意しつつも、ウクライナ政府にも「被害を減らさなければならない」と警告した〉

文理融合のアプローチ

――戦時下の子どもたちに限らず、存在自体が「未来」である子どもたちへの大学としてのアプローチには、どんなものがありますか。

辰巳砂　局部的に言うと、現代システム科学域の取り組みです。文系でも理系でもない、文理融合の学域です。子どもの問題も含めて、現代の諸問題を取り扱っています。ユニセフの活動に、学生を参加させているゼミもある。子どもの貧困の問題を、真正面から解決していく研究室もあります。2030年がゴールのSDGsのために、どのようなことをしたらいいのか。学問は本来、SDGsのような間近のことを研究目的にしませんが、私どもは取り組んでいます。2030年の後は次のゴールを設定する。

辰巳砂昌弘
大阪生まれ大阪育ち。67歳。大阪大学工学部卒。工学博士。専門は、無機材料化学、ガラス科学など。電気自動車への搭載が期待される全固体電池の研究などで世界をリードする。在籍者が卒業するまで、大阪市立大学、大阪府立大学の学長も兼ねる。（撮影：陶器浩平）

そのように社会課題に対して「総合知（知の融合）」でアプローチする、新大学の「顔」のひとつです。

〈「総合知」という言葉は、2020（令和2）年に改正された「科学技術・イノベーション基本法」の規定のなかで生まれた。内閣府は昨年3月に「総合知」について「多様な『知』が集い、新たな価値を創出する『知の活力を生むこと』」と解説。日本の目指すべき社会について「一人ひとりが多様な幸せ（well-being）を実現できる社会」とした〉

――全体で見るとどうですか。

辰巳砂　私たちは「共創と総合知」を掲げています。「共創」は、ある特定の視点とか専門知から未来を語るのではなくて、異なる専門、知見を持った人が共に知恵を出し合って最善の利益をつくる。「共創」して「総合知」にしていく。相互に理解し、相互に尊重し、相互の背景と文化を守り合うこと。自由と人権、そして平等と平和こそが、本学が掲げる「共創」のための多様性や「総合知」に直結するものとして貴重だと考えています。

――「共創」がキーワードになっている。

辰巳砂　そうです。一人ひとりの子どもには、それぞれ事情があります。それを大人は、大人の視点で判断してしまう。ある時間で切り取ったり、その時点での可能性みたいなものだけで子どもが持つ未来、価値を判断している。そうではなくて、一人ひとりの子どもが持っている夢や得意なこと、そして様々な生き方や環境など、そのすべてに意味がある。その一つひとつを大切にすることによって、未来に向けての社会づくりが「共創」できる。大学からの子どもたちへのアプローチという意味でも、多様性を重んじる「共創」の理念が重要ではないかな、と思っています。